

(2006) 宇佐美まゆみ、木林理恵、木山幸子、金銀美 「『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)』の開発と『BTS による多言語話し言葉コーパス』の構築-BTSJ の理論的背景と本コーパスを用いた人間の相互作用の研究例(日本語会話の場合)-『言語情報学研究報告 13 自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」:245-261. 17 頁. 2006 年 11 月.

「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」の開発と『BTS による多言語話し言葉コーパス』の構築

-BTSJ の理論的背景と本コーパスを用いた人間の相互作用の研究例(日本語会話の場合)-¹

宇佐美 まゆみ

(東京外国語大学大学院教授, 事業推進担当者)

木林 理恵

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

木山 幸子

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

金 銀美

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

1. はじめに

東京外国語大学大学院 (以下, TUFS) 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点 (以下, UBLI)」言語教育学班談話グループでは, 対人コミュニケーションという観点から, 人間の相互作用としての自然会話を研究している。社会の中で人間が生きていくには, 円滑なコミュニケーションを成立させることが不可欠である。対人コミュニケーションを円滑に行うための知見を得るには, 自然会話における人間の相互作用を研究することが非常に有用である。外国語教育の場においても, その知見を取り入れる必要があると考える。

本稿では, まず, 人間心理と対人コミュニケーションのメカニズムを解明するための有用なデータとしての自然会話を研究するためのツールである「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」の理論的背景と概要を紹介する。次に『BTS による多言語話し言葉コーパス』の構築過程から明らかになった知見をまとめる。最後に, 共同発話という現象を取り上げ, BTSJ を用いた研究のプロセスを示す。ここから, 円滑なコミュニケーションのメカニズムを明らかにするためには, 人間の相互作用としての会話の研究が必須であることを主張する。

¹ 本稿は, 2005 年 12 月 9 日に東京外国語大学で開催された, 「ワークショップ C-ORAL-ROM / UBLI 共同研究報告: 話ことばコーパス—その重要性と応用—」における英語による口頭発表の内容を日本語でまとめた論文である。

2. BTSJ の理論的背景と概要

自然会話における相互作用を分析するには、それに適した文字化システムが必要である。日本語では、方言独特の珍しい調音を留めるために音声記号としてのカタカナ表記法を用いる方言研究のためのもの(沢木 1984)、元来英語においてエスノメソロジーの領域における研究のために開発されたシステムを日本語の分析に適用させたもの(水川 2001)、また、音声自動認識や自然言語処理などの研究のためのコーパスに用いられているもの(小磯他 2001; 前川他 2001) 等、いくつかの文字化システムがある。これまでのシステムの多くは、定性的分析には活用できても定量的分析には適していないシステムが主流だった。一方、自然言語処理のように定量的分析に適するように開発された文字化システムでは、形態素解析などに適するように、絶対的なポーズの長さによって発話が区切られたり、タグが付与されたりしている。そのため、このようなシステムは、対人コミュニケーションのメカニズムを探究するために、会話の中での話者同士のやりとりの展開を分析する研究には、活用しにくい。

BTSJ は、従来の言語学的観点・または工学的観点から文字化システムが開発された目的とは異なり、人間の相互作用についての研究を深めるためのツールとしての文字化の原則として開発された。次にその理論的背景を述べる。

宇佐美 (1999) は、対人コミュニケーション研究の方法論として、「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」を提唱している。「言語社会心理学」は、言語使用という相互作用を通して、人間関係のあり方やコミュニケーション・ダイナミクスを探ることが目的である。そのために、次のような手順を採っている。

- ① 研究目的に応じて、条件を統制したデータを収集する。
- ② フォローアップ・アンケート(インタビュー)などで、必ず被験者の背景的情報や、会話自体に関する感想などを収集し、なんらかの形で定量的処理ができるようにする。
- ③ 定性的分析に加え、定量的分析もしやすい形で文字化資料を作成する。
- ④ 分析項目をコーディングして、定量的処理ができるようにする。
- ⑤ コーディングの信頼性は、2人の評定者間の信頼性係数により判断する
- ⑥ コーディングの過程で失われたものがないかなどを、必ず、定性的分析で、確認・検討する。

このような「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」に適するものとして、BTSJ は開発された。BTSJ は、その名の通り、「基本的な文字化の原則」であり、汎用性を念頭において構築されたシステムである。特定の研究目的に応じて、例えば、より詳細な音声情報を付加するなど、BTSJ を基本にしつつも、独自に活用できる。一般的な表計算ソフトを用いているため、研究者間での共有が容易であろう。

BTSJ における分析の単位は、「発話文」である。「発話文」とは、「会話という相互作用における「文」と定義されている。これは、基本的に、「文」を成していると捉えられるものを「1 発話文」としている。しかし、自然会話では構造的に文が完結していない発話もあるため、話者交替や間なども考慮に入れる。BTSJ は、この「発話文」ごとに分析項目のコーディングや集計処理がしやすいように構成されている。BTSJ では、以下のようなフォームを基に文字化する。

表 1. BTSJ による文字化資料のフォーム

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容

ライン番号に加えて、BTSJ で分析の単位としている「発話文」の番号を記す列を設けている。これを用いて会話を文字化すると、表 2 の通りになる。

表 2. BTSJ による文字化資料の実例²

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容
51	46	*	YF01	なんかこの部屋すごい寒い、くないですか?。
52	47	*	JBM03	=あ、寒いですが、やっぱり<笑いながら>。
53	48	*	YF01	はい、なんか入ったとたんすごい寒いな(<笑い>)と思って。
54	49-1	/	JBM03	えー、さっきなんか冷房 22℃に設定....
55	50	*	YF01	はあ。
56	51	*	JBM03	ええ。
57	49-2	*	JBM03	されたんですよ。
58	52	*	YF01	されてたんですか、ひ。
59	53	*	JBM03	やっぱりあれですか?、あんまり冷房には強くない<ほう><。>。
60	54	*	YF01	<そう><。>ですね、はい。
61	55	*	YF01	よくないですね、体にあまり。

² 文字化資料上で用いている各種の記号の意味については、付録の記号凡例を参照されたい。

62	56	*	JBM03	ええ、私は好きなんですけどね<笑い>。
63	57	*	YF01	あ、私の上司も冷房大好きな人で、(えーえー)すごい冷蔵庫みたいな中で、仕事しないと頭が冴えないっていう(えー)人なんですけども。

次に、改行の原則について説明する。ライン 51-53 のように、基本的には話者が交替するたびに改行する。ただし、1ラインで発話文が終了する場合としない場合がある。ライン 60-61 のように、話者が交替しなくとも、同一話者が複数の「発話文」を続けて発話するときは、「発話文」ごとに改行する。ただし、ライン 63 にあるように、相手の発話に重なる短い小聲のあいづちや笑いについては、() に入れ、相手の発話の中の最も近いと思われる場所に挿入する。

完成した文字化資料を用いて実際に分析する際には、どちらの話者の発話であるか一見して分かるように、話者ごとに色分けしたものをを用いる。表 3 のように「発話内容セル」の右側に「コーディングセル」を設け、個々の分析対象についてコーディングする。なお、具体的なコーディングの例は、4 節で示す。

表 3. BTSJ による文字化資料に追加したコーディングセルの例

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	コーディング セル
51	46	*	YF01	なんかこの部屋すごい寒い、くないですか?。	
52	47	*	JBM03	あ、寒いですが、やっぱり<笑いながら>。	
53	48	*	YF01	はい、なんか入ったとたんすごい寒いな(<笑い>)と思って。	
54	49-1	/	JBM03	えー、さっきなんか冷房 22℃に設定....	
55	50	*	YF01	はあ。	
56	51	*	JBM03	ええ。	
57	49-2	*	JBM03	されたんですよ。	
58	52	*	YF01	されてたんですか、ひ。	
59	53	*	JBM03	やっぱりあれですか?、あんまり冷房には強くない<ほう>{<}。	
60	54	*	YF01	<そう>{>}ですね、はい。	
61	55	*	YF01	よくないですよ、体にあまり。	
62	56	*	JBM03	ええ、私は好きなんですけどね<笑い>。	

63	57	*	YF01	あ、私の上司も冷房大好きな人で、(えーえー)すごい冷蔵庫みたいな中で、仕事しないと頭が冴えないっていう(えー)人なんですけども。
----	----	---	------	--

人間の相互作用の研究のための文字化システムとしては、形式的な基準のみではなく、諸々の機能を判断するための相対的な基準が必要である³。発話文の認定がそうであるように、BTSJ では、様々な現象について相対的な基準を採用しているというのが特徴である。

3. 『BTS による多言語話し言葉コーパス』の構築過程と概要

本節では、人間の相互作用を研究するツールである『BTS による多言語話し言葉コーパス』の構築過程と概要を紹介し、明らかになった点を述べる。

当コーパスは、会話参加者の性別や社会的地位など、条件統制をした会話が収録されているため、追試や、他言語との対照研究を合理的に行うことができる。また、BTSJ によるコーパスであるため、話者交替や重なりなどが詳細に示されており、研究者が会話の流れを理解しやすい。さらに、発話文という分析の単位に基づいて文字化されているため、発話文ごとにコーディングすることが可能である。

現在、2 種類のコーパスが構築されている。そのひとつは、実際の言語運用のパターンを明らかにするために機能ごとに談話を収録したコーパスである。もうひとつは「人間の相互作用」の研究に有効に活用できるものとして構築しているコーパスである。以下、それぞれについて詳述する。

3.1 実際の言語運用のパターンを明らかにするために機能ごとに談話を収録したコーパス

TUFS-UBLI では、17 言語にわたる外国語学習教材として、40 の機能別に 40 のスキットを収録した TUFS 会話モジュールを、Web 上で公開している⁴。談話グループは、これらの機能が自然会話においてはどのように運用されているかを比較検討するため、自然会話データから各機能を抽出するための基準を設定した上で、当研究室にある自然会話データから、談話を抽出した。この談話資料集が、『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語 2』である。詳細は関崎他 (2003) を参照されたい。

当コーパスを構築するにあたっては、状況によって間接的な言い回しが選択されることや、文脈の中で単語自体の意味とは別の意味が伝わる可能性があるという指摘(Austin, 1960; Searle, 1960; Thomas, 1995)などを考慮に入れ、40 の機能を定義し、その定義を満たす典型的と思われる「言語形式」を設定した。この 2 つの観点を組み合わせ、表 5 のように、3 つの

³ Gumperz and Berenz (1993) の *Transcribing conversational exchanges* というシステムでも、発話の機能を判断するために、同様の方針をとっている。

⁴ URL は次のとおりである。http://www.coelang.tufts.ac.jp/modules/

タイプを設定した。

表 5. 当該の機能と当該の機能を表す典型的な言語形式の有無という観点からの抽出談話の分類

		当該の機能を表す典型的な言語形式	
		有	無
当該の機能	有	タイプ1	タイプ2
	無	タイプ3	——

タイプ1は、典型的な言語形式を用いて機能を実現している場合である。例えば、「情報を求める（存在と場所）」について、場所を尋ねるために、典型的な表現である「どこ」を用いて、「あなたはどこから来たの?」と言う場合である。タイプ2は、典型的な言語形式を用いず、その機能を実現している場合である。例えば、「依頼する」なら、同級生にノートを借りるために、「貸してください」等という典型的な表現を用いず、「昨日授業休んだんだけど」と述べただけで、相手がノートを貸してくれた場合である。タイプ3は、当該の機能に典型的な言語形式が見られるが、その機能ではなく別の機能が実現されている場合である。例えば、男の子たちの会話で、一方の話者がおならをした後に、もう一方の話者が「屁こくな」と言った場合である。ここで「～(する) な」という「禁止」の機能に典型的な言語形式は現れていますが、すでにしてしまったことについて禁止することはできない。この場合の「屁こくな」という発話は、「禁止」ではなく、相手がおならをしたことに対する「責め」だと考えられる。

分類した結果、機能によって各タイプの比率は異なるが、全体的には、タイプ1が、約74%と最も多くを占めていた。それでも、タイプ2は17%、タイプ3も9%見られた。

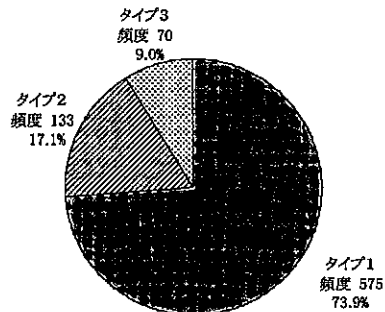


図1 各タイプの談話の頻度の総談話数に占める割合

典型的な言語形式によって機能が実現するタイプ1が最も多く現れていたが、これは、自然会話において言語形式のみが重視されるということをしているわけではない。というのも、タイプ1は、典型的な形式によって機能が実現されている場合であるが、それでも、形式のみではなく、会話の流れ全体を考慮に入れなければならない。そうでなければ、典型的な形式を用いても別の機能を実現しているタイプ3と区別して、タイプ1であると判断することができないからである。また、タイプ2は、明示的な言語表現がないままに機能が実現した場合であるから、話し手のみではなく、聞き手の参加が必要である。つまり、機能と形式の観点から分類したすべてのタイプの判断は、会話全体の流れを考慮に入れないとできないのである。

この点から、外国語教育における会話教育へ示唆することがある。人は、状況や文脈に応じて相手の反応を見ながら個々の発話をするによって、円滑な対人関係を維持したり構築したりしようとする。また、典型的な言語形式を提示するときも、常に、文脈や状況を考慮に入れる必要があるということである。

3.2 「人間の相互作用」の研究に有効に活用できるものとして構築したコーパス

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話1』は、日本語母語話者同士の会話であり、121 会話から成るコーパスである。雑談、教師と学生の面談、電話会話などが収録されている。

表 6. 『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話1 (日本語母語話者同士の会話)』

番号	場面	話者と話者同士の関係	データ数	総分数
1	雑談	学生, 友人同士/初対面	49 会話	1,046 分
2	論文指導	教師と学生	12 会話	120 分
3	断りの電話会話	女子学生 $\begin{cases} \text{先輩} \\ \text{同級生} \\ \text{後輩} \end{cases}$	39 会話	79 分
4	依頼の電話会話	学生, 男性友人同士/女性友人同士	20 会話	53 分
計			121 会話	1,298 分 (約 21 時間)

『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話2』は、日本語母語話者と学習者の会話であり、33 会話から成るコーパスである。韓国語学習者との雑談、台湾中国語学習者との雑談、OPI インタビューなどが収録されている。

表 7. 『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 2 (日本語母語話者と学習者の会話)』

番号	場面	話者と話者同士の関係 (一方は日本語母語話者)	データ数	総分数
1	OPI インタビュー	フランス人, 初対面	4 会話	40 分
2	雑談	韓国人, 台湾人, 友人同士/初対面	53 会話	385 分
計			57 会話	425 分 (約 7 時間)

これらの 2 つの公開コーパスは、先に紹介した特定の機能に着目して整備したコーパスではなく、雑談や議論などの 10 分以上の会話が録音されたものである。友人同士や初対面、日本語母語話者や学習者、年齢など、条件が統制された上でデータが収集されているため、比較研究が行いやすい。

人間の相互作用の研究を効率的に進めていくには、データを共有化することが必要である。談話グループは、現在も、公開コーパスに収録されている会話と同じ条件で追加収集したり、別の場면을収集したりするなどして、このコーパスの拡充を図っている。今後は、異文化間コミュニケーション、外国語教育の領域へ貢献する知見を提供するためにも、とくに母語話者と非母語話者との会話をより充実させていく必要があると考えている。

4. 人間同士の相互作用の研究過程

本節では、BTSJ による具体的な研究例に基づいて、実際の状況における円滑な人間のコミュニケーションの実現のために、人間同士の相互作用の研究が必要だということ、また、外国語学習者が会話における参加者の相互作用や文脈に注意を払う必要があるということを示す。

宇佐美 (2006, 本報告集掲載) は、対人コミュニケーションのメカニズムを探るための会話分析には、ローカルとグローバル双方の観点が必要であると主張している。

会話をローカルな観点から分析するということは、文レベル・発話行為レベルの分析、また、当該会話内の要因を考慮に入れて分析することを指す。また、会話をグローバルな観点から分析するということは、話者の年齢・社会的地位・性等といった、発話のやりとりに影響する当該会話外の要因、また、談話の「基本状態」を考慮に入れて分析することを指す。談話の「基本状態」とは、宇佐美 (2001b) の「ディスコース・ポライトネス理論」の中で提唱されている概念で、当該談話に占める諸要素の「構成比率」や「頻度の平均」、「談話展開の典型」等のことである。「基本状態」からの動きが、談話において特別な効果を生むと述べている。この 2 つの観点からの分析により、その現象の特徴を包括的に捉えることが可能となる。

このことを示す例として、共同発話文の研究 (宇佐美・木林 2002) を取り上げる。

4.1 BTSJ による文字化資料を用いた共同発話文の分析過程

共同発話文は、「ひとり以上の話し手によって作られるひとつの文」と定義されている (宇佐美・木林 2002)。表 8 に、共同発話文の例を挙げる。

表 8. 共同発話文の現れている会話例

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	共同 発話文
58	46	*	A	まーなんだか、あのそうですね、世の中の動きとかそういうのに自然に興味があると、すごくおもしろいんだろうと思うんですけどね>{<。	
59	47	*	B	<そうですね>{>。	
60	48-1	/	A	まあ、何でも(ええ)そうなんでしょうけど、	
61	49	*	B	えーえーえーえー。	
62	48-2	*	A	=>こうやらなきやいけない強制として(えー)やられるとやっぱり…。	先行
63	50	*	B	嫌みたい<ですね>{<。	後行
64	51	*	A	<そうですね>{>。	

話者 A は社会科教師であり、話者 B は、自分の息子は社会科が嫌いだと述べている。その後で、「“まあ、何でもそうなんでしょうけど、こうやらなきやいけない強制としてやられるとやっぱり”→“嫌みたいです。”という 1 つの発話を 2 人で作っている。ライン 62 のように先の話者による発話を先行発話、ライン 63 のように、後の話者による発話を後行発話と呼ぶ。

会話において、1 人で 1 つの発話を完結させるのが通常であり、2 人で 1 つの発話を完結させる共同発話文というのは、特殊な現象だといえる。宇佐美・木林 (2002) では、共同発話文の特徴を明らかにするために、日本語母語話者同士の会話 (以下、母語場面) と、日本語母語話者と中級日本語学習者の会話 (以下、接触場面) において、共同発話文を様々な観点から分析している。共同発話文は、相手の言いたいことを「理解したことを示す」ために起こる現象だと解釈している。ここでは、後行発話の機能についてのコーディングを紹介し、ローカルな分析とグローバルな分析について述べる。

宇佐美・木林 (2002) では、後行発話の機能を「質問」「答え」「確認」「叙述」の 4 つにコーディングした。以下にそれぞれの例を挙げる。

「質問」：後行発話で、語尾を上げるなどして疑問の機能を持っているもの

例1: 日本の芸能人で、誰が格好良いかを話している (接触場面)

- 1 A と、なに、『Twenty-first』??(うんうんうん)、[黒板に書きながら]『Twenty-first』
が、ありますけど、この中のひとり、は、『Twenty-first』は歌手ユニット名]
→2 B かつよくないひと?。

「答え」: 後行発話が、先行発話の答えになっているもの

例2: YF01の仕事(教師)について話している(母語場面)

- 1 A あ、せ、せ、なんていうの、わたしのころはこうじゃなかったとかあ、
(あつ、あつ) そういうのって…。
→2 B あります<笑い>。

「確認」: 後行発話が、「でしょう」「ですね」に置き換えられ、確認の機能を持っているもの

例3: 大学に通っている年数について話している(母語場面)

- 1 A それじゃ、今年で、6年目。
→2 B ですね(うん)。

「叙述」: 後行発話が、上記3つに当てはまらないもの

例4: Bの子供について話している(母語場面、表8再掲載)

- 1 A こうやらなきやいけない強制として(えー)やらされるとやっぱり…。
→2 B 嫌みたい<ですね>{<}。

これらの分析項目を、BTSJによる文字化資料を用いて、以下のようにコーディングできる。

表9 共同発話文のコーディング例

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	共同 発話文	機能
58	46	*	A	まーなんだか、あのそうですね、世 の中の動きとかそういうのに自然に 興味をもてると、すごくおもしろい んだらうと思うんですけどね >{<}。		
59	47	*	B	<そうですね>{>}。		
60	48-1	/	A	まあ、何でも(ええ)そうなのでしょう けど、		
61	49	*	B	えーえーえーえー=。		

62	48-2	*	A	=こうやらなきやいけない強制とし て(えー)やらされるとやっぱり…。	先行	
63	50	*	B	嫌みたい<ですね>{<}。	後行	叙述
64	51	*	A	<そうですね>{>}。		

「発話内容」セルの右側に列を設け、「コーディングセル」として利用する。まず、会話
の中で共同発話文が生じたところをコーディングする。その上で、抽出された共同発話文
について、後行発話の機能の列を設け、コーディングする。このように、BTSJを用いると、
共同発話文のような話者同士の相互作用を分析しやすい。なぜなら、「発話文」という、話
者同士の相互作用を考慮に入れた相対的な分析単位が設けられているからである。さらに、
BTSJは表計算ソフトによる資料であるため、その後の検索・集計も容易に行うことができ
る。

4.2 ローカル分析とグローバル分析という観点からの共同発話文の結果と考察

以下、宇佐美・木林(2002)で得られた結果を、ローカルな観点とグローバルな観点から
考察してみる。表10に、母語場面・接触場面における会話全体における共同発話文の生起
頻度と割合を示す。会話全体から共同発話文の生起の割合を算出すると、接触場面におい
ては1.0%、母語場面においては1.3%であった。

表10 会話全体における共同発話文の生起頻度と割合

	会話時間(分)	総発話文数	共同発話文の頻度	共同発話文の割合
接触場面	66	1286	13	1.0%
母語場面	59	1619	21	1.3%

次に、後行発話の機能の内訳を、母語場面・接触場面ごとに、図2に示す。

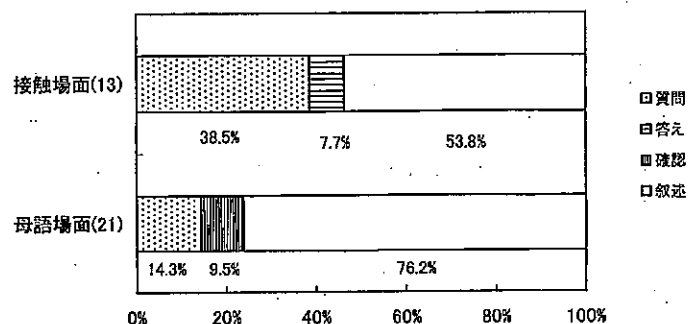


図2 共同発話文における後行発話の機能 (割合)

この結果において注目すべき点は、母語場面と接触場面とで「質問」の割合が異なるということである。接触場面では母語場面と比べ、「質問」の割合が高い。さらに、接触場面における割合を日本語母語話者と日本語学習者とで別個にしてみると、「質問」の機能は、母語話者が44.4%、学習者が25.0%という割合であった。母語話者による「質問」は、母語場面においてより(14.3%)、接触場面におけるもののほうが高い割合を占めていることが分かる。

会話全体における共同発話文の生起率というグローバルな観点から考えると、母語場面でも接触場面でも、共同発話文の生起率は1%前半であり(表10)、会話において、たいていは、ひとりの話者が自分の発話を完結させていることが分かる。つまり、話し手が日本人同士でも、日本語母語話者と日本語学習者でも、日本語の会話においては、共同発話文が起こる割合はあまり変わらない。

グローバルな観点からは母語場面と接触場面に差は見られない。しかし、後行発話の機能というローカルな観点から分析すると、母語場面と接触場面で違いが見られる。

日本語母語話者は、日本語学習者に対して、母語話者に対してより、「質問」の形で後行発話を発する割合が多い。これは、母語話者は、後行発話という形で言語的な側面から学習者の発話に助け舟(串田 2002; 森本 2002)を出していると解釈できる。例えば、以下のような会話である。

例5: 香港人の日本語学習者が、日本語母語話者から、日本の高校生の派手なファッションについて聞いた後で

INNS ほんこん、香港の高校生は、そんな、そんなに、えー、服を着たら、えー、先生は、え、先生、先生をしか…<しか>(<.>),,

→2 NS <先生>(<.>)にしかられますか?。

3NNS うん、しかられます。

NNS は、香港の高校生が派手な服を着たら、先生に怒られるということを言いたかったが、「えー」という挿入句がたびたび入ったり、「しか…」と言いだりして、言葉探しをし、文を完結させられない。そこで、NS は、「先生にしかられますか」と引き取っている。その後 NS が「うん、しかられます」と NNS の後行発話を受け入れている。したがって、この共同発話文は、NS の言いたいことを NNS が察して「助け舟」を出すやりとりであったといえる。

このように、ローカルな観点から後行発話の機能を見ると、日本語母語話者に対する場合と日本語学習者に対する場合では、多く使用される後行発話の機能は異なることが分かった。日本語母語話者は、共同発話文という会話のスタイルを利用して、相手に応じて様々な働きかけをしているということがうかがえるのである。自然会話を研究対象として話者同士の相互作用のメカニズムを捉えるためには、グローバル・ローカル双方の観点からの分析が必要であるということが示唆される。

4.3 人間の相互作用の研究結果が外国語教育に示唆すること

以上、対人コミュニケーションのメカニズムを解明するための人間の相互作用の研究例として、共同発話文の研究を取り上げ、その特徴を考察した。

3節で述べたように、外国語教育にとって、このような相互作用の現象の機能や適切な生起率などの情報を提供することは、重要である。例えば、共同発話文の場合、日本語会話においては、母語話者は学習者に対して、「質問」の形で後行発話を発することが多い。また、日本語と英語を較べると、日本語会話において、共同発話文の生起率がやや高いという報告もある(Suzuki and Usami 2006, 本報告集)。

このような情報の具体的な取り入れ方については様々な考慮をする必要があるが、初級の段階から、自然会話の映像を見せ、重なりやあいづち、共起する身振りなどの特徴を「気づかせる」ことを、早くから行うと効果的であろう。学習者が教室外においても談話ストラテジーなどを学べるよう効率的に補助することが、教師に求められていることであると考える。

5. おわりに

本稿では、自然会話を、人間心理と対人コミュニケーションのメカニズムを解明するための有用なデータとして研究することに適した BTSJ を紹介するとともに、BTSJ による文字化資料を収録したコーパスの構築過程を述べ、最後に、話者同士の相互作用をローカル、グローバル双方の観点から分析することの意義を、研究例を取り上げて論じた。自然会話を研究対象として、そこに現れる対人コミュニケーションのプロセスを通して人間を探究するという観点が、円滑なコミュニケーションの実現に有用であるということを提示でき

たと思う。今後も、多言語における様々な場面の自然会話データを蓄積し、『BTSによる多言語話し言葉コーパス』の拡充を進めていく予定である。本コーパスを用いた人間の相互作用の実証的研究が蓄積されていくことにより、対人コミュニケーションの研究領域の発展に貢献できることを願う。

引用文献

- Austin, J.L. (1960) *How to Do Things with Words*. Oxford University Press.
- Ferrara, K. 1992. The interactive achievement of sentence: Joint productions in therapeutic discourse. *Discourse Processes* 15, 207-228
- Gumperz, J. J. and Berenz, N. 1993. Transcribing conversational exchanges. In Edwards and Lampert (eds.) *Talking Data*. USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- 小磯花絵他 (2001) 『日本語話し言葉コーパス』における書き言葉の方法とその基準について『日本語学』9, 43-58.
- 前川喜久雄他 (2001) 『日本語話し言葉コーパス』の設計『音声研究』4(2), 51-61.
- 水川喜文 (2001) 「会話分析による録画記録の利用法〜トランスクリプト作成の方法論〜」『北星女子短期大学紀要』37, 77-84.
- 水谷信子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』12(4), 28-36.
- 森本郁代 (2002) 「発話権の尊重と会話進行ー日本語母語話者と非母語話者の会話に見られる『引き取り』をめぐるー」『相互行為の民族誌的記述ー社会的文脈・認知過程・規則ー』平成 11 年度〜13 年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書, 59-78.
- 西阪仰 (1997) 『相互行為分析という視点』, 金子書房.
- Ono, T. and Yoshida, E. 1996. A study of co-construction in Japanese: We don't finish each other's sentences. *Japanese/Korean Linguistics* 5, 115-130.
- 沢木幹栄 (1984) 「方言録音資料の作成法」, 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 2ー方言研究法ー』, 国書刊行会.
- Searle, J.R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 関崎博紀、木村理恵、木山幸子、李恩美、施信余、宇佐美まゆみ(2004) 『『BTSによる多言語話し言葉コーパス-日本語 2』の作成過程と整備の結果から示されること-会話教育への思慮-』, *Linguistic informatics III: The first international conference on linguistic informatics-State of the art and the future-21st Century COE: Center of Usage-Based Linguistic Informatics, Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies(TUFS)*:301-322.
- Suzuki, T. and Usami, M. 2006. 本報告集. Co-constructions in English and Japanese revisited: A quantitative approach to cross-linguistic comparison. 9th International Pragmatics Conference.

- Thomas, J. (1995) *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman.
- 宇佐美まゆみ (1997) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) の開発について」『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』, 文部省科学研究費一般研究 (C) (課題番号 07680312) (研究代表者: 西郡仁朗) 研究成果報告書, 12-26.
- (1999) 「談話の定量的分析-言語社会心理学的アプローチ-」『日本語学』18 (11), 40-56.
- (2001a) 「言語社会心理学」『月刊言語』30 (3), 231-234.
- (2001b) 「談話のポライトネス-ポライトネスの談話理論構想-」『談話のポライトネス』(第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書), 国立国語研究所, 9-58.
- Usami, Mayumi 2002. *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 宇佐美まゆみ (2003) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 C (2) (課題番号: 13680351) (研究代表者: 宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, 4-21.
- (2006, 本報告集) 「談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』, 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, 21-46.
- 宇佐美まゆみ・木林理恵 (2002) 「母語場面と接触場面における『共同発話文』の比較」『社会言語科学会第 10 回研究大会予稿集』, 15-20.

文字化資料で用いられている記号凡例 (宇佐美 2006 より抜粋)

- 。 [全角] 1 発話文の終わりにつける。
- ,, 発話文の途中で相手の発話が入った場合, 前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ, 改行して相手の発話を入力する。
- ①[全角] 1 発話文および 1 ライン中で, 日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
- ②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- ①複数読み方があるものを漢字で表す場合, 最も一般的な読み方ではなく, 特別な読み方で発せられたことを示すために, その読み方を平仮名で ' ' に入れて示す。
- ②通常とは異なる発音がなされた場合など, 音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は, ' ' の中に正式な表記をする。
- 『 』 視覚上, 区別した方が分かりやすいと思われるもの, 例えば, 本や映画の題名のよ

- うな固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明したような部分等は、『 』でくくる。
- “ ” 発話中に、話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合、その部分を" " でくくる。
- ? 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?, 」をつける。
- ?? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
- [↑][→][↓] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いる。
- /少し間/ 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
- /沈黙 秒数/ 1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は1発話文として扱い1ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。
- = = 改行される発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短い、まったくないことを示すためにつける。これは、2つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。
- … 文中、文末に関係なく、音声的に言いよんだように聞こえるものにつける。
- < >(<) 同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{<}をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{>}をつける。
- [[]] [全角]第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「[[]]」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に「[[]]」をつけ、第2話者の発話文の冒頭には「]]」をつける。
- [] 文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの一番最後に記しておく。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その

- 後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。
- < > 相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
- # 聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。
- [] トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。